
小さな飴玉一つ

いっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな飴玉一つ

【Zマーク】

Z4375P

【作者名】

いっちゃん

【あらすじ】

ある少女が転校して來た。

その少女はとても可愛く、一目惚れしてしまった魁。
関係を深めようと、いろいろな事をするが・・・?
魁の恋愛ストーリー、ぜひご覧になって下さい。

転校生

今日は始業式。

今年から、小学生の最上級生。6年生となつた。

その6年生の第一歩のとき、君と出会つた・・・

「よつ、魁!」

「おひ、晴樹。」

俺は、友達と会い、共に学校へ行つていた。

「魁、今日から新学期だろ。転校生来るかな？」

そういえば今日は転校生が来るかもしれない。どんな転校生が来て
も、まあ、男ならば俺は仲良くするつもりだ。

「転校生か。楽しみだな。」

そして、運よく、転校生は俺のクラスに来たのだ。

「おれ魁! よろしくな! 友哉!」

転校生には、俺から話をかけて、すぐに友達になった。

そして、晴樹と転校生の友哉と下校をしているとき、俺の斜め前に、

他のクラスにいた、女の転校生をがいた。その周りには、その転校生の新しい友達らしき人がいた。

「魁、あの人も転校生だよね。」

「あ、ああ、そうだな。それがどうしたんだ?」

「ただ聞いてみただけだよ。」

俺は、なぜかずっとその転校生の人の後ろ姿を、ずっと見ていた。

「ど」「見てんだ魁?」

「あ、ああ、そこの中を見てた。」

たまたま見ていた方向に、虫がいた。

そしたら、他のクラスの転校生が振り返って來た

「うーーーー」と、心の中で、意味が分からぬ言葉を発した。それは、とても驚いたからだ。

俺は、そのまま下校していたが、晴樹と友哉と話しながらも、転校生のことを思つてた。その内容は、「結構可愛いな」この一言を。

俺は、ある時、ふと思つた。

「一田惚れかも。」

俺は小6だし、もう好きな人ができるても全然おかしくない。

俺は、次の日も、そのまた次の日も、転校生が目に映るたび、転校生の姿をじっと見つめてしまい、転校生のことを、とても考えてしまつ。

新学期が来て、1週間くらい経った頃、俺は完全に確信した。俺は、あの転校生のことを。完全に、恋をしてるかも知れないと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4375p/>

小さな飴玉一つ

2010年12月12日01時30分発行